

## 第13回超領域社会工学研究会報告書

新型コロナウイルスの蔓延する中、若干の後ろめたさを感じながらも“三密”を基本にマスク着用の元、厳重な管理体制で研究会を開催致しました。

日時：3月28日（土）～29日（日）

会場：長野県上諏訪温泉 双泉の宿 朱白

参加者：7名

以下、発表テーマです。

近藤大博「月刊総合雑誌2020年4月号の論調」

『文芸春秋』『Voice』『中央公論』という日本を代表する総合雑誌の論調を中心に「新型コロナウイルス」に関する評論を解説されました。政府の対応の遅れが批判されている今日この頃ですが、政府内や省庁間の意思疎通が円滑に行われていなかったことが最大の要因であったのではないかとの事でした。最近のメディアは木を見て森を見ることがをしませんが、総合雑誌は、長いスパンで物事を見ることが出来得るといふ長所があるとの指摘がなされました。

何はともあれ、早期のコロナウイルスの終息を望むところです。

詳しくは <http://gscs.jp/kondo/new.html> （近藤大博 Web Site）

もご参照下さい。

安田裕子「GIST患者とのかかわりから考察するスピリチュアルケア」

病人やその家族の心のケアを専門にすることを、臨床パストラルケア（Clinical Pastoral Care）といい、欧米では、そのような専門家がたいていの病院にいます。発表者は実際にGIST患者（消化管間質腫瘍）との面接に基づいた会話記録からどのような心のケアが必須なのかについて考察します。

人間は肉体的な存在だけでなく、精神的・霊的な存在でもあるので、病院において、患者の心のケアをする人がどうしても必要となります。GISTに限らず、如何なる病気にも共通することでしょうが、ケアワーカー自体が如何に患者に「寄り添い」、「共にあることの重要性」を認識できるかがポイントとなることでしょう。

増子保志「血液型と性格の社会史」

血液型による性格診断は、1900年代初頭より社会的な影響を及ぼしてきたという歴史的事実があります。具体的には、白人優位主義やナチスドイツによる血液型による人種差別、軍隊における将兵の気質や能力を分類する手段として利

用されてきました。戦後になっても、血液型で人間を理解することは一大ブームとなり、現在においても日本人の血液型性格診断好きは、統計データからも明らかです。しかしながら、血液型と性格の関係は、学問的には否定されており、常識を疑うことをモットーとする発表者から既存の学問的枠組みに再考を求めるなどの課題と問題点が指摘されました。

加藤香須美「カンチャナブリが伝えること - 旧泰緬鉄道の歴史 - 」

タイの国鉄には、東西南北に向かう鉄道があり、西に向かう鉄道は「死の鉄道」と呼ばれています。昨年度、埼玉親善大使としてタイ、バンコクに赴任されていた発表者がアカデミー賞受賞作品の映画「戦場にかける橋」で有名になったカンチャナブリを訪問した際に感じたことや考えたことを中心に発表されました。

「死の鉄道」とは旧泰緬鉄道のことで、第二次世界大戦中、シンガポールを経由してビルマへ軍需物資を輸送する為に日本軍によって建設されたものです。鉄道の敷設には、連合国兵士やアジア人の捕虜が駆り出され過酷な労働から多くの人命が失われました。これらの歴史的史実を伝える施設で“この事実がタイでどのように伝えられているか”を命題として、展示を見たものの、その建設における苛酷な生活状況や死に至る概要を見て、日本人として深い反省と悲しみを感じたとの事でした。この様な惨劇が二度と起こらないことを希求するばかりです。

鈴木美喜「違う」を見る

「違いが分かる女」を自認する発表者が、“知ることは大事”というポリシーのもと関心のある書物を遠路はるばる持参され、参加者で閲覧し、それぞれの考えを述べました。

具体的には、『世界あたりまえ会議』『天井から覗く世界のリアル』『それ行け珍バイク』『翻訳できない世界のことば』等の書籍を取り上げ、教養溢れる参加者たちにも「まだまだ知らない事」があることを改めて認識し、知ることの重要性を実感しました。

草野純子「サバイバル飯体験報告」

明日何が起こるか分からない今、いざという時に体験していないことは出来ないという事を命題とし、災害によってライフラインが停止したという前提で実験を行いました。具体的には「ポトフ」「塩昆布キャベツ」「紙コップ蒸しパン」を調理し、同じ食材でも様々な調理が可能なことや意外に簡単に調理が出来ることが分かりました。これらの体験から、災害はいつ発生するのかは予測がつかないので日頃から経験や準備をしておくことの大切さを改めて認識した実験で

あったと結論づけられました。何事においても日頃が大切という事でしょう。

宮園圭大郎「天皇陵の歩き方・旅先としての魅力」

果たして天皇陵はどのように管理されていたのか？という疑問から、“歌う旅人”の異名を持つ発表者が、得意のフットワークを生かして各地の天皇陵を巡られたりレポートを発表されました。昭和・明治・孝明・応神天皇陵について概観された後、神武天皇陵についての魅力を語られました。特にどの様な経緯で治定（決定）されたかに関心を持たれ時系列に沿った考察がなされました。

天皇陵は1都2府5県に亘って全124代が治定されており興味深い存在であり、治定の手法自体も考古学や社会学の研究対象として意義のあるものと結論づけられました。余談ですが、各天皇陵には御朱印ならぬ「御陵印」があり、御陵印が設置された経緯についても知りたいところです。

こちらもご参照下さい。

<https://ameblo.jp/litmus86/entry-12573936993.html> （光は灯台より）

研究会終了後、上諏訪温泉のやわらかいお湯を楽しみ、研究会での一番のお楽しみ懇親会をかくも賑々しく開催致しました。今回は研究部会長を始めとして女性会員1名のお誕生日に偶然にも重なり、「Happyバースデー♪」の合唱や地元の米焼酎、地ビールを満喫し、新型コロナウイルスに負けないぞ！との意気込みと共に、研究会同様大変有意義な時間を過ごしました。

次回は状況を見ての判断とし、現在のところ未定です。

懇親会については部会長の手下のダック氏によるブログもご覧ください。

<https://ameblo.jp/petenduk/> （ペテンダックの御膳日記）

（研究部会長 増子保志）



